

免疫項目に対する高速凝固採血管の影響評価

◎深津 直紀¹⁾、大前 星佳¹⁾、田中 彩日¹⁾、北井 陽子¹⁾、大佐賀 順子¹⁾、西山 有紀子¹⁾、長尾 美紀²⁾
京都大学医学部附属病院¹⁾、京都大学大学院医学研究科臨床病態検査学²⁾

【背景】採血管管壁にトロンビンが塗布された高速凝固採血管は、一般的な生化学項目への影響がほとんどないことが知られており、迅速な結果報告が可能との報告がなされている。一方で、免疫項目への影響の程度に関する報告は少ない。当院においても2022年1月より高速凝固採血管を採用しているが、影響の程度が不明な項目に対しては変わらず凝固促進採血管を使用している。

【目的】高速凝固採血管の免疫項目に対する影響の程度を確認し、適応項目を拡大するため、凝固促進採血管と高速凝固採血管を用いて測定値の比較検討を行った。

【方法】測定装置はAIA-CL2400およびルミパルスL2400で、測定試薬は各装置の専用試薬を用いた。測定対象項目は、ホルモンや感染症項目を含む25項目とした。当院に検査依頼があり、ネオチューブ（ニプロ株式会社、以下凝固促進管）と、インセパックII-D（徳山積水工業株式会社、以下高速凝固管）の両方が同日採血されている患者の残血清で同日測定を実施し、凝固促進管に対する高速凝固管の測定値を相対値(%)として算出した。目標検体数は各

項目につき50検体とした。

【結果】本抄録では、一部の結果について記載する。AIA-CL2400搭載のPIVKA-IIでは、相対値の平均が86.0%と高速凝固管が低値傾向を示し、最も乖離が大きかった検体の相対値は41.0%であった（凝固促進管：25.1 mAU/mL、高速凝固管：10.3 mAU/mL）。同機搭載のコルチゾールの相対値の平均は101.1%、ルミパルスL2400搭載のHBs抗体では98.0%であった。

【考察】コルチゾールやHBs抗体は、おおむね問題がない結果であった。PIVKA-IIは、高速凝固管内のトロンビンの影響を受けて、低値化するという報告がある。本結果は先行報告と矛盾せず、高速凝固管を用いたPIVKA-IIの測定は避けるべきと考えられた。発表時においては、他項目の結果や追加検討も含め、より詳細に報告する。

京都大学医学部附属病院 検査部

TEL : 075-751-3484